

縷紅新草

泉鏡花

青空文庫

あれあれ見たか、

あれ見たか。

二つ蜻蛉とんぼが草の葉に、

かやつり草に宿をかり、

人目しのぶと思えども、

羽はうすものかくされぬ、

すきや明石あかしに緋ひぢりめん、

肌のしろさも浅ましや、

白い絹地の赤蜻蛉。

雪にもみじとあざむけど、

世間稲妻、目が光る。

あれあれ見たか、

あれ見たか。

「おじさん——その提灯……」
ちようちん

「ああ、提灯……」

唯ただいま今、午後二時半ごろ。

「私が持ちましょう、磴いしだんぶつかに打撞ぶつかりますわ。」

一肩上に立った、その肩も裳すそも、嫺しなやかな三十ばかりの女房が、白

い手を差向けた。

お米といつて、これはそのおじさん、辻町糸七——の従姉で、
 おととし
 一昨年世を去つたお京の娘で、土地に老舗しにせの塗師屋ぬしやなにがしの妻
 女である。

撫なでつけの水々しく利いた、おとなしい、静しずかな円鬚まるまげで、頸えりあ
 脚しがすつきりしている。雪国の冬だけれども、天気は好よし、小
 春日和だから、コオトも着きものないで、着衣きもののお召めしで包むも惜しい、
 色の清く白いのが、片手に、お京——その母の墓へ手向ける、小
 菊の黄菊と白菊と、あれは侘わびしくて、こちこちと寂しいが、土地
 から、今時はお定さだまりの俗となに称なうる坊さん花、薊あざむらかの軟ないような樺かばむ
 紫らふさぎのこげいとう小鶏頭こげいとうを、一束にして添えたのと、ちよつと色紙の二本

たばねの線香、一いちもんろうそく錢蠟燭を添えて持った、片手を伸べて、
「その提灯を」といったのである。

山門を仰いで見る、処々、壊くえ崩れて、草も尾花もむら生えの
高い磴を登りかかった、お米の実家の檀だんなでら那寺——仙晶寺とい
のである。が、燈籠寺とうろうでらといった方がこの大城下によく通る。

去さんぬる……いやいや、いつの年も、盂蘭盆うらぼんに墓地へ燈籠を供え
て、心ばかり小さな燈あかりともを灯すのは、このあたりすべてかわりなく、
親類一門、それぞれ知ちかづき己の新仏へ志のやりとりをするから、十
三日、迎火むかひを焚たく夜よからは、寺々の卵塔は申すまでもない、野に
山に、標しめいし石、奥津城おくつきのある処、昔を今に思い出したような無縁
墓、古塚までも、かすかなしめつぽい苔こけの花が、ちらちらと切燈きり

籠こに咲いて、地つちの下の、灰ほ白しろい寂さびしい亡もう霊れいの道みちが、草くさがくれ
 木この葉はがくれに、暗やみ夜みには著しるく、月つきには幽かすけく、冥めい々めいとして顯あら
 われる。中なかでも裏うら山やまの峰みねに近ちかい、この寺てらの墓かぶつ場ばの丘かみの頂たけに、一ひと樹き、
 榎えのきの大おほ木きが聳そびえて、その梢こごすえに掛かける高たか燈とう籠籠が、市いち街がいの広ひろ場ば、辻つじ、
 小こ路ち。池いけ、沼くまのほとり、大おほ川がは縁べり。一ひと里り西にしに遠とほい荒あ海うみの上うへから
 望のぞめば、仰あがげば、佇たたずめば、みみな空そらに、面おもて影かげに立たつて見みえるので、
 名なに呼よんで知しられていいる。

この燈籠寺とうろうじに對たいして、辻町つじまち糸いと七しちの外がい套とうの袖そでから半はん間まな面つらを出で
 した昼ひる間まの提てい灯とうは、松まつ風かぜに颯さつと誘さそわれて、いま二ふた葉は三さん葉は散ちりかか
 る、折をりからの緋もみじ葉はも灯ともれず、ほかほかと暖ぬい磴せきの小こ草くさの日ひだまり
 に、あだ白しろけて、のびれば欠あくび伸のび、縮くむと、噓くしやみをしそうさうで可お笑かしい。

辻町は、欠伸と嚏を緬なえたような掛声で、

「ああ、提灯。いや、どっこい。」

と一段踏む。

「いや、どっこい。」

お米が莞爾にっこり、

「ほほほ、そんな掛声が出るようでは、おじさん。」

「何、くたびれやしない。くたびれたといつたつて、こんな、提灯の一つぐらい。……もつとも持重りがしたり、邪魔になるようなら、ちよつと、ここいらの薄すすぎの穂ひっかへ引掛けて置いても差支えはないんだがね。」

「それはね、誰も居ない、人通りの少い処だし、お寺ですもの。」

そこに置いといたって、人がどうもしはしませんけれど。……持ちましようというのに持たさないで、おじさん、自分の手で……」

「自分の手で。」

「あんな、知らない顔をして、自分の手からお手向けなさりたいのでしよう。ここへ置いて行つては、お志が通らないではありませんか、悪いわ。」

「お叱言こゝとで恐入るがね、自分から手向けるつて、一体誰どなただい。」

「それは誰方どなただか、ほほほ。」

また莞爾にっこり。

「せいせい、そんな息をして……ここがいい、ちよつとお休みなさいよ、さあ。」

ちようど段々なかつぎ中継の一土間、向むこう棧敷と云つた処、さかりに
 緋葉した樹の根に寄つた方で、うつむき態なりに片袖をさしむけたの
 は、すが縫れ、手を取ろう身構えで、腰を靡なよ娜やかに振向いた。踏掛
 て塗下駄に、模様の雪輪が冷くかかつて、淡紅ときの長襦袢ながじゆばんがはら
 りとこぼれる。

なまめか媚しさ、というといえども、お米はおじさんの介添のみ、心
 も留めなそうだが、人妻なればはばか憚られる。そこで、件くだんの昼提灯を
 持直すと、柄の方を向うへ出した。黒塗の柄を引取つたお米の手
 は、なお白くて優しい。

憚られもしようもの。磴たるや、山賊の構えた巖いわの砦おとりの火見ひのみの
はしご階子と云つてもいい、たてよこ縦横町条の家やごとの屋根、辻の柳、遠お

ちこち 近の森に隠顕しても、十町三方、城下を往来の人々が目を^{そばだつ}敬れば皆見える、見たその容子^{ようす}は、中空の手摺^{てすり}にかけた色小袖に外套の熊蟬が留つたにそのままだろう。

蟬はひとりでジジと笑つて、緋葉^{もみじ}の影へ^{ひらり}翩然と飛移つた。

いや、翩然となんぞ、そんな器用^ゆに行くものか。

「ありがとう……提灯の柄のお力添に、片手を^{テツキ}纏つて、一方に洋杖だ。こいつがまた素人が拾つた^{かい}櫛^かのようで、うまく調子が取れないで、だらしなく袖へ搔^{かいこ}込んだ処^なは情ない、まるで^{りようづえ}両杖^りの形だな。」

「いやですよ。」

「意気地はない、が、止むを得ない。お言葉に従つて一休みして

行こうか。ちようどお誂え、あつら 苔こけなめら滑……というところ冷いが、日当

りで暖い所がある。さてと、ご苦勞を掛けた提灯を、これへ置くか。樹下石上というところ豪勢だが、こうした処は、地藏盆むしろに箆むしろを敷いて鉦かねをカンカンと敲たたく、はっち坊主そのままだね。」

「そんなに、せつかちに腰を掛けてさ、泥がつきますよ。」

「構わない。破やれ麻だよ。たかが墨染にて候だよ。」

「墨染でも、喜撰でも、所作舞台ではありません、よごれますわ。」

「どうも、これは。きれいなその手巾ハンケチで。」

「散っているもみじの方が、きれいです、払っては澄まないような、こんな手巾。」

「何色というんだい。お志で、石へ月影まで映して来た。ああ、いい景色だ。いつもここは、といううちにも、今日はまた格別です。あいかわらず、海も見える、城も見える。」

といった。

就中、公孫樹は黄なり、紅樹、青林、見渡す森は、みな錦

葉を含み、散残った柳の緑を、うすく紗に綾取った中に、層々た

る城の天守が、遠山の雪の巔を抽いて聳える。そこから斜に濃い

藍の一線を曳いて、青い空と一刷に同じ色を連ねたのは、いう

迄もなく田野と市街と城下を巻いた海である。荒海ながら、日和

の穏かさに、渚の浪は白菊の花を敷流す……この友禪をうちかけ

て、雪国の町は薄霧を透して青白い。その袖と思う一端に、周囲

三里ときく湖は、昼の月の、半円なるかと視ながめられる。

「お米坊。」

おじさんは、目を移して、

「景色もいいが、容ようす子すがいいな。——提灯屋の親おやじ仁にが見み惚とれたのを知しつてるかい。

（その提灯を一つ、いくらです。）といつたら、

（どうぞ早や、お持ちなされまして……お代はおついでの時、）

……はどうだい。そのかわり、遠国他郷のおじさんに、売りものを新聞づつみ、紙づつみにしようともしないんだぜ。豈あにそれ見惚とれたりと言いわさざるを得えんやだ、親仁に。」

「おっしゃい。」

と銚子ちようしのかわりをたしなめるような口振で、

「旅の人だか何だか、草鞋わらじも穿はかないで、今時そんな、見たばかりで分りますか。それだし、この土地では、まだ半季勘定がございます。……でなくつてもさ、当寺おてらへお参りをする時、ゆきかえり通るんですもの。あの提灯屋さん、母に手を曳ひかれた時分から馴染なじみです。……いやね、そんな空からお世辞をいつて、沢山。……おじさんお参りをするのに極きまりが悪いもんだから、おだてごかしにはぐらかして。」

「待った、待った。——お京さん——お米坊、お前さんのお母つかさんの名だ。」

「はじめまして伺います、ほほほ。」

「ご挨拶、恐入った。が、何々院——信女でなく、ごめんを被らう。その、お母さんの墓へお参りをするのに、何だつて、私がきまりが悪いんだろう。第一そのために来たんじゃないか。」

「……それはご遠慮は申しませんの。母の許とこへお参りをして下さいますのは分つていますけれどもね、そのさきに——誰かさん——」

「誰かさん、誰かさん……分らない。米ちゃん、一体その誰かさんは？」

「母が、いつもそういつていましたわ。おじさんは、（極りわるがり屋）という（長い屋）さんだから。」

「どうせ、長屋住居ずまいだよ。」

「ごめんなさい、そんなじやありません。だからつても、何も私に——それとも、思い出さない、忘れたのなら、それはひどいわ、あんまりだわ。誰かさんに、悪いわ、済まないわ、薄情よ。」

「しばらく、しばらく、まあ、待っておくれ。これは思いも寄らない。唐突の儀を承る。弱つたな、何だろう、といつちやなお悪いかな、誰だろう。」

「ほんとに忘れたんですか。それで可いんですか。嘘でしょう。それだとあんまりじやありませんか。いつそちやんと言いますよ、私から。——そういつても釣出しにかかつて私の方が極りが悪いかも知れませんが、……おじさん、おじさんが、むかし心中をしようとした、おんな婦人のかた。」

「……………」

藪やぶから棒をくらつて膨らんだ外套の、黒い胸を、辻町は手でおさえる真似して、目をみは睜ると、

「もう堪忍してあげましょう。あんまり知らないふりをなさるか
らちよつと驚おどかしてあげただけけれど、それでも、もうお分りに
なつたでしょう。——いつかの、その時、花の盛さかりの真夜中に。――

――あの、お城の門のまわり、暗い堀の上を行つたり、来たり……」

お米の指が、行つたり来たり、ちらちらと細く動くと、その動
くのが、魔法を使ったように、向う遥はるかな城の森の下くぐりに、
小さな男が、とぼんと出て、羽織も着ない、しよぼけた形をあら頭わ
すとともに、手をこまぬ拱こうべき、首を垂れて、とぼとぼと歩ある行くのがおぼろ朧に

見える。それ、糧に飢えて死のうとした。それがその夜の辻町である。

同時に、もう一つ。寂しい、美しい女が、花の雲から下りたように、すつと翳^{かげ}つて、おなじ堀を垂^{たら}々^{たら}下りに、町へ続く長い坂を、胸^{やわらか}を柔に袖を合せ、肩^{ほっそ}を細りと裙^{すそ}を浮かせて、宙^{ただよ}に漾^たうばかり。さし俯^{うつむ}向いた頸^{えり}のほんのり白い後姿で、捌^{さば}く褻^{つま}も揺^ゆぐと見えない、もの静かな品の好^よさで、夜はただ黒し、花明り、土^いの筏^{かだ}に流るるように、満開の桜の咲^{さき}蔽^{おほ}うその長坂を下りる姿が目^めに映^{うつ}つた。

——指を包め、袖を引け、お米坊。頸の白さ、肩のしなやかさ、余りその姿に似てならない。——

今、目のあたり、坂を行く女は、あれは、二十ばかりにして、その夜、（烏をいう）千羽ヶ淵ふちで自殺してしまったのである。身を投げたのは潔い。

卑怯ひきような、未練な、おなじ処をとぼついた男の影は、のめめと生きて、ここに仙晶寺いしだんの磔しだんの中途に、腰を掛けていたのであつた。

二

「ああ、まるで魔法にかかったようだ。」
 頬にあてて打傾いた掌てを、辻町は冷く感じた。時に短く吸込ん

だ煙草たばこの火が、チリリと耳かみを掠めて、爪つまさき先の小石へ落ちた。

「またまったく夢がさめたようだ。——その時、夜あけ頃まで、堀の上をうろついて、いつ家うちへ帰ったか、草へもぐったのか、蒲ふ団とんを引被ひきかぶったのか分らない。打ちぶのめされたようになって寝た耳へ、

——兄さん……兄さん——

と、聞こえたのは、……お京さん。」

「返事をしましょうか。」

「願おうかね。」

「はい、おほほ。」

「申すまでもない、威勢のいい若い声だ。そうだろう、お互はに二

十の歳たちです。——死んだ人は、たしか一つ上だったように後で聞
 いて覚えている。前の晩は、雨あまけ気を含んで、花あかりも朦朧もうろうと、
 霞に綿を敷いたようだった。格子戸そと外のその元気のいい声に、む
 つくり起きると、おつと来たりで、目は窪くぼんでいる……額おでこをさき
 へ、門かどぐち口へ突出すと、顔色の青さを烘あぶられそうな、からりとし
 た春爛たけなわな朝景色さ。お京さんは、結いたての銀杏いちようがえし返で、半襟
 の浅黄の冴くろじゆすえも、黒くろ縷子の帯の艶つやも、霞を払ってきつぱりと立
 っていて、（兄さん身投げですよ、お城の堀で。）（嘘だよ、こ
 こに生きてるよ。）と、うっかり私が言ったんだから、お察しも
 のです。すぐ背後うしろの土間じや七十を越した祖母ばあさんが、お櫃ひつの底
 の、こそげ粒で、茶ちや粥がゆとは行きませぬ、みぞれ雑炊を煮てござ

る。前々年、家が焼けて、次の年、父親がなくなつて、まるで、掘立小屋だろう。住むにも、食うにも——昨夜は城のここかしこで、早い蛙がもう鳴いた、歌を唄つてる虫けらが、およそ羨しい、と云つた場合。……祖母さんは耳が遠いから可かつたものの、（生きてるよ。）は何事です。（何を寝惚けているんです。しつかりするんです。）その頃の様子を察しているから、お京さん——ままならない思遣りのじれつたさの疝癩筋で、ご存じの通り、一うちの眉を顰めながら、（……町内ですよ、こここの。いま私、前を通つて来たんだけれど、角の箔屋。——うちの人じゃあない、世話になつて、はんけちの工場へ勤めている娘さんですとさ。ちゃんと目をあいて……あれ、あんなに人が立っている。）

うらかな朝だけれど、路がひとすじ一条、胡粉ごふんで泥塗だみたように、ずっと白く、寂然しんとして、家やならび、三町ばかり、手前てまへどもとおなじ側かわです、けれども、何だか遠く離れた海際まで、突抜けになつたようで、そこに立っている人ばかりが——身を投げたのは淵ふちだといふのに——打つて来る波を避けるように、むらむらと動いて、地つちがそこばかり、ぐつしより汐しおに濡れているように見えた。

花はちらちらと目の前へ散つて来る。

私の小屋と真まむかい向むかひの……金持は焼けないね……しもた屋うわなの後あと妻りで、町中の意地悪が——今時はもう影もないが、——それぞれの時飛んで来た、燕の羽の形うしろに後あとを刎はねた、橋はしまげ鬚ひげとかいろいろの小さくのつけたのが、門かどの敷石かどに出て来て立つて、おなじように

箔屋の前を熟とすかして視ていた。その継娘は、優しい、うつくしい、上品な人だったが、二十にもならない先に、雪の消えるように白梅と一所に水で散った。いじめ殺したんだ、あの継母がと、町内で沙汰をした。その色の浅黒い後妻の眉と鼻が、箔屋を見込んだ横顔で、お米さんの前髪にくつつき合った、と私の目に見えた時さ。(いとしや。)とその後妻が、(のう、ご親類の、ご新姐さん。)—悉しくはなくても、向う前だから、様子は知ってる、行来、出入りに、顔見知りだから、声を掛けて、(いつ見ても、好容色なや、ははは。)と空笑いをやっただとお思い、(非業の死とはいうけれど、根は身の行いでござりますのう。)とじろりと二人を見ると、お京さん、御母堂だよ、いいか

い。怪我にも真似なんかなさんなよ。即時、好ごきりよう容あじ色ぶな頤あごを打つけるようにしやくつて、（はい、さようでござります、のう。）と云うが疾はやいか、背中の子。」

辻町は、時に、まつげの深いお米と顔を見合せた。

「その日は、当こちら寺へお参りに来がけだったのでね、……お京さん、磴いしだんが高いから半はんてん纏おんぶでなしに、浅黄鹿の子の紐でおぶつていた。背中へ、べつかつこで、（ばあ。）というと、カタカタと薄齒うばの音を立てて家うちン中へ入ったろう。私が後うわなり妻うわなりに赤くなつた。負おぶつていたのが、何を隠そう、ここに好容色で立っている、さて、久しぶりでお目にかかります。お前さんだ、お米坊——二ふたつ歳、いや、三つだったか。かぞえ年。」

「かぞえ年……」

「ああ、そうか。」

「おじさんの家の焼けた年、お産間近に、お母^{つか}さんが、あの、火事場へ飛出したもんですから、そのせいですって……私には痣^{あざ}が
。」
「
睫毛^{まつげ}がふるえる。辻町は、ハツとしたように、ふと肩をすくめた。」

「あら、うっかり、おじさんだと思って、つい。……真^ま紅^かでしたわ、おとなになって今^うじや薄^うり^すとただ青いだけですの。」
おじさんは目を俯^ふせながら、わざと見まもったようにこういつた。

「見えやしない、なにもないじゃないか、どこなのだね。」

「知らない。」

「まあさ。」

「乳の少し傍わきのところ。」

「きれいだな、眉毛を一つ剃そった痕あとか、雪間の若菜……とでも言
つていないと——父がなくなつて歸かへつたけれど、私が一度無理に
東京へ出ていた留守です。私の家うちのために、お京さんに火事場を
踏ふませて申まを訳がないよ。——ところで、その嬰あかんぼ児こが、今お見受
け申まをすお姿となつたから、もうかれこれ三十年。……だもの、記お
憶ぼえも何も臃おぼろおぼろ々とした中に、その悲しいうつくしい人の姿に薄
明ありがさして見える。遠くなつたり、近くなつたり、途中で消え

たり、目先へ出たり——こつちも、とぼとぼと死場所を探していたんだから、どうも人目が邪魔になる。さきでも目障りになつたろう。やがて夜中の三時過ぎ、天守下の坂は長いからね、坂の途中で見失つたが、見失つた時の後姿を一番はつきりと覚えている。だから、その人が淵で死んだとすると、一旦いったん町へ下りて、もう一度、坂を引返ひっかえした事になるんだね。

ただし、そういつた処で、あくる朝、町内の箔屋へ引取つた身投げの娘が、果して昨夜ゆうべ私が見た人と同じだかどうか、実の処は分りません……それは今でも分りはしない。堀端では、前後一度だつて、横顔の鼻筋だつて、見えないばかりか、解りもしない。が、朝、お京さんに聞いたばかりで、すぐ、ああ、それだと思つ

たのも、おなじ死ぬ氣の、氣で感じたのであろうと思う……

と、お京さんが、むこうの後妻うわなりの目をそらして、格子を入つ

た。おぶさつたお前さんが、それ、今のべつかつこで、妙な顔……

……

「ええ、ほほほ。」

とお米は軽く咲容えまいして、片袖を胸へあてる。

「お京さん、いきなり内の祖母ばあさんの背中を一つトンと敲たたいたと

思うと、鉄鍋てつなべの蓋ふたを取つて覗のぞいたつけ、勢いきおいのよくない湯氣が上

る。」

お米は軽く鬢びんを撫なでた。

「ちよろちよろと燃えてる、竈かまどの薪木たきぎ、その火だがね、何だか身

を投げた女ひとをあぶつて暖めているような気がして、消えぎえにそこへ、袖そでづま褌もつを纏もつれて倒れた、ぐつしより濡れた髪と、真白な顔が見えて、まるでそれがね、向う門かどに立っている後妻うわなりに、はかない恋をせかれて、五年前に、おなじ淵に身を投げた、優しい姉さんのようにも思われた。余程そはどうかしていたんだね。

半壊れの車井戸が、すぐ傍そばで、底の方に、ばたん、と寂しずくしい雫しずくの音。

ざらざらと水が響くと、

——身投げだ——

——別べっぴん嬪びんだ——

——身投げだ——

とおもてわめ
と戸外を喚いて人が駆けた。

この騒ぎは——さあ、それから多日しばらく、四方、隣国、八方へ、大波を打ったろうが、

——三年の間、かたい慎み——

だッてね、お京さんが、その女の事ひとについては、当分、口へ出
してうわささえしなければ、また私にも、話さえさせなかつたよ。

——おなじ桜に風だもの、兄さんを誘いに来ると悪いから

——

その晩、おなじ千羽ヶ淵へ、ずぶずぶの黥間なかまだったのに、なま
じ死にはぐれると、今さら気味が悪くなつて、町をうろつくにも、
山の手の辻へ廻つて、箔屋の前は通らなかつた。……

この土地の新聞一種、ひとついろ買つては読めない境遇だったし、新聞社の掲示板の前へ立つにも、土地は狭い、人目に立つ、死出三途ともいう処を、一所に徜徉さまよつた身体からだだけに、自分から気が怯ひけて、避けるように、避けるように、世間のうわさに遠ざかつたから、花の散つたのは、雨か、嵐か、人に礫つぶてを打たれたか、邪慳じゃけんに枝を折られたか。今もつて、取留めた、悉くわしい事は知らないんだが、それも、もう三十年。

……お米さん、私は、おなじその年の八月——ここいらはまだ、月おくれだね、盂蘭盆が過ぎてから、いつも大好きな赤蜻蛉の飛ぶ時分、道があいて、東京へ立てたんだが。——

——ああ、そうか。——

辻町は、息を入れると、石に腰をずらして、ハタと軽く膝をたたいた。

三

その時、外套がいとうの袖にコトンと動いた、石の上の提灯ちようちんの面つらは、またおかしい。いや、おかしくない、大空の雲を淡く透すかして蒼白あおしろい。

「……さて、これだが、手向けるとか、供えるとか、お米坊のいう——誰かさんは——」

「ええ、そうなの。」

と、小菊と坊さん花をちよつと囲つて、お米は静しずかに頷うなずいた。

「その嬰あかんぼ児ごが、串じょうだん戯ごにも、心中の仕損しとんいなどという。——
いずれ、あの、いけずな御母堂から、いつかその前後の事を聞か
されて、それで知つてゐるんだね。」

不思議な、怪しい、縁ゆかりだなあ。——花あかりに、消えて行つた
可哀相あはれさまな人の墓はかはいかにも、この燈籠寺とうろうじにあるんだよ。

若氣わかしのいたり。……」

辻町つじまちは、額ぬかをおさえて、提灯ていとうに俯向うつむいて、

「何なにと思つたか、東京へ——出発間際しゅつぱつかんがい、人目を忍しのんで……という
と悪わるく色氣いろけがあります。何なに、こそこそと、鼠ねずみあるきに、行燈形あんどんなり
のちいさき切籠燈きりこの、就なかんずく中ちゆう、安価やすかなのを一枚細腕ひとつで引いて、梯はしご

子段だんの片暗がりを忍ぶように、この礎いしだんを隅あがの方から上つて来た。

胸も、息も、どきどきしながら。

ゆかただか、羅うすものだか、女郎花おみなえし、桔梗ききよう、萩、それとも薄すすきか、

淡彩色うすざいしきの燈籠より、美しく寂しかろう、白露しずくに雫しずくをしそうな、

その女ひとの姿に供える気です。

中段さ、ちようど今居る。

しかるに、どうだい。お米坊は洒落しやれにも私を、薄情だというけ

れど、人間の薄情より三十年の月日は情がない。この提灯というのじゃないが、燈台下暗しで、とぼんとして気がつかなかった。

申訳より、面めんぼく目がないくらいだ。

——すまして饒舌しゃべつて可いいか知らん、その時は、このもみじが、

青葉で真ま黒くろだった下へ来て、上へ墓地を見ると、向うの峯をぼ
 ツと、霧にして、木曾のははき木だね、ここじゃ、見えない。が、
 有名な高燈籠たかとうろうが榎えのきの梢こずえに灯ともれている……葉と葉をくぐって、燈ひの
 影が露を誘って、ちらちらと樹を伝うのが、長くかかって、幻の
 藤の総なひを、すつと靡なびかしたように仰がれる。絵の模様は見えない
 が、まるで、その高燈籠の宙の袖を、その人の姿のように思つて、
 うっかりとして立つた。

——ああ、呆れた——

目の前に、白いものと思つたつけ、山門を真ま下さりに、藍あいがか
 った浴衣に、昼夜帯の婦人が、

——身投げに逢いに来ましたね——

言う事も言う事さ、誰だと思ひます。御母堂さ。それなら、言
いそんな事だろう。いきなり、がんと撲くわされたから、おじさん
の小僧、目をまるくして胆きもを潰つぶした。そうだろう、当の御親類の
墓地へ、といつては、ついぞ、つけとどけ、盆のお義理なんぞに
出向いた事のない奴やつが、」

辻町は提灯を押えながら、

「酒買とまどいい狸とまどいが途惑とまどいをしたように、燈籠をぶら下げて立っている
んだ。

いう事が捷すばや早いよ、お京さん、そう、のつけにやられたんじや、
事実、親類へ供えに来たものにした処で、そうとはいえない。

——初路さんのお墓は——

いかにも、若い、優しい、が、何だか、弱々とした、身を投げた女の名だけは、いつか聞いていた。

——お墓の場所は知っていますか——

知るもんですか。お京さんが、崖で夜露にすべにたる処へ、石ころ道が切立きつたてで危いから、そんなにとぼついているんじや怪我をする。お寺へ預けて、昼間あらためて、お参りを、そうなさい、という。こつちはだね。日中のこのひなかこ出られますか。何、志はそれで済むからこの石の上へ置いたなり帰ろうと、降参に及ぶとね、犬猫が踏んでも、きれいなお精しようれいよう霊が身震いをするだろう。——とにかく、お寺まで、と云つて、お京さん、今度は片褌かたづまをきりりと端折はしよつた。

こつちもその要心から、わぎと夜になって出掛けたのに、今頃まで、何をしていたろう。（遊んでいた。世の中の煩^{うる}ささがなくて寺は涼しい。裏縁に引いた山清水に……西瓜^{すいか}は驕^{おご}りだ、和尚さん、小僧には内証^{ないしよ}らしく冷して置いた、紫陽花^{あじさい}の影の映る、青い心^{ところてん}太^とをつるつる突出して、芥子^{からし}を利かして、冷い涙を流しながら、見た処三百ばかりの墓燈籠と、草葉の影に九十九ばかり、お精霊の幻を見て涼んでいた、その中に初路さんの姿も。）と、お京さん、好^{すき}なお転婆をいつて、山門を入^いった勢^{いき}だからね。……その勢だから……向^むった本堂の横式台、あの高い処に、晚出^{おそで}の参^ま詣^まを待^{まち}って、お納所^{なっしょ}が、盆礼、お返し^{かえ}のしるしと、紅白の麻糸^{ひっこ}を三宝に積んで、小机を控えた前へ。どうです、私が引込^{ひっこ}むも

んだから、お京さん、引取った切籠燈きりこをツイと出すと、

——この春、身を投げた、お嬢さんに。……心中を仕損つ

た、この人の、こころざし——

私は門まで遁出にげだしたよ。あとをカタカタと追って返して、

——それ、紅い糸を持って来た。縁結びに——白いのが好よ

かったかしら、……あいては幻……

と頬をかすられて、私はこの中段まで転げ落ちた。ちと大袈裟おおげさだがね、遠くの暗い海の上で、稲妻がしていたよ。その夜、途中からえらい降りです。……

……

……

辻町は夕立を懐おもうごとく、しばらく息を沈めたが、やがて、ちよつと語調をかえて云つた。

「お米坊、そんな、こんな、お母さんに聞いていたのかね。」

「ええ、お嫁に行つてから、あと……」

「そうだろうな、あの氣象でも、極きまりどころは整然ちやんとしている。

嫁入前の若い娘に、余り聞かせる事じやないから。

——さて、問題の提灯だ。成程、その人に、切籠燈きりこのかわりに

供えると、思つたのはもつともだ。が、そんな、実は、しおらしいとか、心入れ、とかいう奇特なんじやなかつたよ。懺悔ざんげをする

がね、実は我ながら、とぼけていて、ひとりでおかしいくらいなんだよ。月夜に提灯が贅ぜいたく沢なら、真昼間まっぴるまぶらで提げたのは、

何だろう、余程よつほど半間さ。

というのがね、先刻さつきお前さんは、連つれにはぐれた観光団が、鼻の下を伸ばして、うっかり見物している間抜けに附合なう気で、黙つてついていてくれたけれど、来がけに坂下の小路中なかで、あの提灯屋の前へ、私がぼんやり突立つったつたろう。

場所も方角も、まるで違うけれども、むかし小学校の時分、学校近所の……あすこは大川近ぢかの窪地くぼちだが、寺があつて、その門前に、店の暗い提灯屋があつた。髯ひげのある親仁おやしが、紺の筒袖を、斑む々らむらの胡粉ごごふんだらけ。腰衣のような幅広の前掛まえかけしたのが、泥絵具だらけ、青や、紅あかや、そのまま転がったら、楽書らくがきの獅子ししになり、そう、牡丹ぼたんをこつてりと刷毛はけで彩えどる。緋ひも桃色ももいろに颯さつと流して、

ほかす手際が鮮彩あざやかです。それから鯉の滝登り。八橋一面の杜かきつ
 若ばたは、風呂屋へ進上の祝だろう。そんな比羅びらえ絵を、のしかかっ
 て描いているのが、嬉しくて、面白くつて、絵具を解き溜ためた大
 摺鉢おすりばちへ、鞠子まりこの宿しゆくじやないけれど、薯蕷とろろ汁となつて溶込むよう
 に……学校の帰途かえりにはその軒下へ、いつまでも立つて見ていた事
 を思出した。時雨も霽みぞれも知つている。夏は学校が休やすみです。桜の春、
 また雪の時なんぞは、その緋牡丹の燃えた事、冴さえた事、葉にも
 苔こけにも、パツパツと惜おしげ気なく金銀の箔はくを使うのが、御殿の廊下へ
 日の射さしたように輝いた。そうした時は、家うちへ帰る途中の、大川
 の橋に、綺麗な牡丹が咲いたつけ。

先刻さつきのあの提灯屋は、絵比羅も何にも描いてはいない。番傘の

白いのを日向ひなたへ並べていたんだが、つい、その昔を思出して、あんまり店を覗のぞいたので、ただじゃ出て来にくくなつたもんだから、観光団お買上げさ。

——ご紋は——

——牡丹——

何、描かせては手間がとれる……第一実用むきの気といつては、いささかもなかつたからね。これは、傘からかさでもよかつたよ。パツと拵うしろげて、菊を持ったお米さんに、背後うしろから差掛けて登れば可よかつた。」

「どうぞ。……女万歳の広告に。」

「仰せのとおり。——いや、串じょうだん戯ははよして。いまの並べた傘

の小間隙間すきまへ、柳を透いて日のさすのが、銀の色紙しきしを拵たげたよう
 な処へ、お前さんのその花についていたろう、蝶が二つ、あの店
 へ翔たちこ込んで、傘の上へ舞ったのが、雪の牡丹へ、ちらちらと箔はくが
 散浮く……

そのままに見えたと思つた時も——箔——すぐこの寺に墓のあ
 る——同町内に、ぐつしよりと濡れた姿をはかな儂く引取つた——箔屋
 ——にも気がつかなくつた。薄情とは言われまいが、世帯の苦勞
 に、朝夕は、細く刻んでも、日は遠い。年月が余り隔へだたると、目めのま
 前の菊え日和も、遠い花の霞になつて、夢の朧おぼろが消えて行く。

が、あらためて、澄まない気がする。御母堂の奥津城を展じた
 あとで。……ずつと離れているといいんだがな。近いと、どうも、

この年でも極^{きま}りが悪い。きつと冷かすぜ、石塔の下から、クツクツ、カラカラとまづ笑う。」

「こわい、おじさん。お母^{つか}さんだがいいいけれど。……私がついていきますから、冷かしはしませんから、よく、お拝みなさいましょね。」

——（糸塚）さん。」

「糸塚……初路さんか。糸塚は姓なのかね。」

「いいえ、あら、そう……おじさんは、ご存じないわね。」

——糸塚さん、糸巻塚ともいうんですって。」

この谷を一つ隔てた、向うの山の中途に、鬼子母^{きしもじん}神様のお寺がありましたよ。」

「ああ、ざくろでら 柘榴寺——しんじょうじ 真成寺。」

「ちよつとごめんなさい。私も端の方へ、少し休んで。……いいえ、構うもんですか。落葉といつてもにしき 錦のようで、勿体ないほどですわ。あの柘榴の花の散つた中へ、鬼子母神様の雲だといって、草履を脱いで坐つたのも、つい近頃のもうですもの。お母さんにつれられて。白い雲、青い雲、紫の雲は何様でしょう。鬼子母神様はあか 紅い雲のように思われますね。」

墓所はじき 直近いのに、面影をはる 遥かにしの 偲んで、母親を想うか、お米はうっとり 恍惚して云つた。

——聞くとともに、辻町は、その壮年を三四年、相州ずし 逗子に過ごした時、新婚のかれ 渠の妻女の、病厄のためにまさに絶えなんとし

た生命を、医療もそれよ。まさしく観世音の大慈の利験りやくに生きたことを忘れない。南海靈山の岩殿寺いわどのじ、奥の御堂みどうの裏山に、ひとつと一ひとつと処ころ咲満ちて、春たけなわな白びやっこう光こうに、奇くしき薫かおりの漲みなぎった紫むらさの董すみれの中に、白い山兔の飛ぶのを視みつつ、病中の人を念じたのを、この時まざまざと、目前の雲に視て、輝く靈巖れいげんの台に対し、さしうつむくまで、心しんちゆう衷ゆうに、恭礼黙拝したのである。――

お米の横顔さえ、※ろうたけて、

「栢榴寺、ね、おじさん、あすこの寺内に、初代元祖、友禪の墓がありましよう。一頃は訪とう人どころか、苔こけの下に土も枯れ、水も涸かわいていたんですが、近ちかごろ年他国の人たちが方々から尋ねて来

て、世評が高いもんですから、記念碑が新しく建ちましてね、名所のようにになりました。それでね、ここのお寺でも、新規に、初路さんの、やっぱり記念碑を建てる事になったんです。」

「ははあ、和尚さん、娑婆しやば気けだな、人寄せに、黒枠で……と身を投げた人だから、薄彩うすざい色水しき絵具の立看板。」

「黙つて。……いいえ、お上人よりか、檀家の有志、県の観光会の表向きの仕事なんです。お寺は地所を貸すんです。」

「葬った土とは別なんだね。」

「ええ、それで、糸塚、糸巻塚、どっちにしようかっていつてるところ。」

「どっちにしろ、友禅の（染）に対する（糸）なんだろう。」

「そんな、ただ思いつき、趣向ですか、そんなんじやありません。あの方、はんけちの工場へ通つて、縫取をしていらしつてき、それが原因もとで、あんな事になつたんですもの。糸も紅糸べにいとからですわ。」

「糸も紅糸……はんけちの工場へ通つて、縫取をして、それが原因もと？……」

「まあ、何にも、ご存じない。」

「怪我にも心中だなどという、そういつちや、しかし濟まないけれども、何にも知らない。おなじ写真を並んで取つても、大勢の中だと、いつとなく、生別れ、死別れ、年が経たつと、それつきりになる事もあるからね。」

辻町は向直つていったのである。

「蟹は甲らに似せて穴を掘る……も可訝おかしいかな。おなじ穴の狸……飛んでもない。一升入の瓢ひさごは一升だけ、何しろ、当推量も左前だ。誰もお極きまりの貧のくるしみからだと思つていたよ。」

また、事実そうであつた。

「まあ、そうですか、いうのもお可哀相。あの方、それは、おくらしに賃仕事をなすつたでしょう。けれど、もと、千五百石のおやしきじょうろう邸の女※さん。」

「おお、ざつとお姫様だ。ああ、惜しい事をした。あの晩一緒に死んでおけば、今頃はうまれかわつて、小いろの一つも持った果報な男になつたらう。……糸も、紅糸は聞いても床しい。」

「それどころじゃありません。その糸から起つた事です。千五百石の女※ですが、初路さん、お妾めかけばら腹はらだつたんですつて。それでも一粒種、いい月日もとの下もとに、生れなすつたんですけれど、廃藩以来、ほどなく、お邸は退転、御両親も皆あの世。お部屋方の遠縁へ引取られなさいましたのが、いま、お話のありました箔屋なのです。時節がら、箔屋さんも暮しが安易らくでないために、工場こうば通いをなさいました。お邸育ちのお慰みから、縮ちりめん緬細工もお上手だし、お針は利きます。すぐ第一等の女工さんでごく上等のものばかり、はんけちと云つて、薄色もありましようが、おもに白絹へ、蝶花を綺麗に刺ししゅう繡ゆうをするんですが、いい品は、国産の誉れの一つで、内地より、外国へ高級品で出たんですつて。」

「なるほど。」

四

あれあれ見たか

あれ見たか

……………

「あれあれ見たか、あれ見たか、二つ蜻蛉とんぼが草の葉に、かやつり草に宿かりて……その唄を、工場で唱いましたってさ。唄が初路さんを殺したんです。」

細い、かやつり草を、青く縁へとって、その片端、はんけちの

雪のような地へ赤蜻蛉を二つ。「

お米の二つ折る指がしなつて、内端うちはに襟をおさえたのである。

「一ツずつ、蜻蛉が別ならよかつたんでしようし、外の人の考かんが案えで、あの方、ただ刺繍だけなら、何でもなかつたと言うんです。どの道、うつくしいのと、仕事の上手なのに、嫉ねたみ猜そみから起つた事です。何につけ、かにつけ、ゆがみ曲りに難癖ねたをつけな いではおきません。処を図案まで、あの方がなさいました。何から思いつきなすつたんだか。——その赤蜻蛉の刺繍が、大層な評判だし、分けて輸出さきの西洋の気受けが、それは、凄すごい勢いきおいで、どしどし注文が来ました処から、外国まで、恥はを曝さらすんだつて、羽をみんな、手足にして、紅いのを縮緬はのように唄はい離やして、身

肌を見せたと、騒ぐんでしよう。」

(巻初に記して一いっさん 粲さんに供した俗謡には、二三行、

.....

.....

脱落があるらしい、お米がくしよう口誦はばかを憚ったからである。)

「いやですわね、おじさん、蝶々や、蜻蛉は、あれは衣服きものを着ているでしようか。

——人目しのぶと思えども

羽はうすもの隠されぬ——

それも一つならまだしもだけれど、一つの尾に一つが続いて、すつと、あの、羽を八つ、静かに銀糸で縫ったんです、寝ていや

しません、飛んでいるんですわね。ええ、それをですわ、

——世間、いなずま目が光る——

——恥を知らぬか、恥じないか——と皆でわあわあ、さも初路
 さんが、そんな姿絵を、紅い毛、碧い目にまで、露呈に見せて、
 お宝を儲けたように、唱い立てられて見た日には、内気な、優し
 い、上品な、着ものの上から触られても、毒蛇の牙形が膚に沁み
 る……雪に咲いた、白玉椿のお人柄、耳たぶの赤くなる、もうそ
 れが、碎けるのです、散るのです。

遺書かきおきにも、あつたそうです。——ああ、恥かしいと思つたば

かりに——」

「察しられる。思いやられる。お前さんも聞いていようか。むか

し、正しい武家の女によしよう性たちは、拷問ごうもんの笞しもと、火水の責にも、断じて口を開かない時、ただ、衣きぬを褌うばう、肌着はを剥ぐ、裸体にするといふとともに、直ちに罪に落ちたというんだ。——そこへ掛けると……」

辻町は、かくも心弱い人のために、西班牙スペインセビイラの煙草工場のお転婆うらやを羨んだ。

同時に、お米の母を思った。お京がもしその場に処したら、対あ手いの工女の顔に象棋盤しょうぎばんの目を切るかわりに、酔ながら心ところてん太ぶを打ちまけたろう。

「そこへ掛けると平民の子はね。」

辻町は、うっかりいった。

「だって、平民だって、人の前で。」

「いいえ。」

「ええ、どうせ私は平民の子ですから。」

辻町は、その乳のわきの、青い若菜を、ふと思つて、覚えず肩を縮めたのである。

「あやまった。いや、しかし、千五百石の女※、昔ものがたり以上、あわれにはかない。そうして清らかだ。」

「中将姫のようでしたつて、白羽二重の上へすべとると、あの方、白い指が消えました。露が光るように、針の尖をさき伝つて、薄い胸から紅い糸が揺れて染まつて、また膝かかつて、銀の糸がきらきらと、何枚か、幾つの蜻蛉が、すいすいと浮いて写る。——（私が傍そばに

見ていました)って、鼻ひしやげのその頃の工女が、茄子なすの古漬のような口を開けて、老い年で話すんです。その女だつて、その臭い口で声を張つて唱つたんだと思うと、聞いていて、口惜くやしい、にら睨んでやりたいようですわ。——でも自害をなさいました、後一年ばかり、一ひとつろ時はこの土地で湯屋でも道端でも唄つて、お気の弱いのをたつとむまでも、初路さんの刺繡を恥かしい事にいいましたとき。

——あれあれ見たか、あれ見たか——、銀の羽がそのまま手足で、二つ蜻蛉が何とかですもの。」

「一体また二つの蜻蛉がなぜ変だろう。見聞みききが狭い、知らないんだよ。土地の人は——そういう私だつて、近頃まで、つい気がつ

かずに居たんだがね。

手紙のついでで知っておいでだろうが、私の住んでいる処と、京橋の築地までは、そうだね、ここから、ずっと見て、向うの海まではあるだろう。今度、こちら当地へ来がけに、いた歯が疼んで、なじみ馴染のはいしや歯科医へ行ったとお思い。その築地は、というと、用たしで、こうじま齒科医は大廻りに赤坂なんだよ。途中、四谷新宿へ突抜きのち町の大通りからみやげざか三宅坂、日比谷、……銀座へ出る……歌舞伎座の前をまっすぐ真直に、めあて目的のあかしちよう明石町までとしやべ饒舌つてもいい加減の間、いっぱい町充滿、屋根一面、うえした上下、左右、縦も横も、うすあか微紅い光る雨に、花吹雪を浮かせたように、羽が透き、身が染つて、数限りもない赤蜻蛉の、大流れをみなぎ漲らして飛ぶのが、行違つたり、まんじ卍

に舞乱れたりするんじやあない、上へ斜ななめ、下へ斜、右へ斜、左へ斜といった形で、おなじ方向を真北へさして、見当は浅草、千せんじ住、それから先はどこまでだか、ほとんど想像にも及びません。

——明石町は昼の不知火しらぬい、隅田川の水の影が映ったよ。

で、急いで明石町から引返ひっかえして、赤坂の方へ向うと、また、

おなじように飛んでいる。群れて行くゆ。齒科医はいしやで、椅子に掛けた。

窓の外を、この時は、幾分か、その数はまばらに見えたが、それでも、千や二千じゃない、二階の窓をすれすれの処に向う家ひさしの廂見当、ちようど電信、電話線の高さを飛ぶ。それより、高くもない。ずっと低くもない。どれも、おなじくらいな空を通るんだがね、計り知られないその大群は、層を厚く、密度を濃こまやかにしたの

じやなくつて、薄く透通る。その一つ一つの薄い羽のようにさ。

何の事はない、見た処、東京の低い空を、淡紅とき一面の紗しやを張つ

て、銀の霞に包んだようだ。聳そびえた立つた、洋館、高い林、森なぞ

は、さながら、夕日の紅べにを巻いた白浪の上の巖いわの島と云つた態かたちだ。

つい口へ出た。(蜻蛉が大層飛んでいますね。) 齒醫師はいしやが(は

あ、早朝からですよ。)と云つたがね。その時は四時過ぎです。

帰途かえりに、赤坂見附で、同じことを、運転手に云うと、(今は少

くなりました。こんなもんじやありません。今朝六時頃、この見

附を、客人で通りました時は、上下、左右すれ違うとサワサワと

音がします。青空、青山、正面の雪の富士山の雲の下まで裾野を

蔽おほうといひます紫雲英げんげのように、いっぱいです。赤蜻蛉に乗せら

れて、車が浮いて困ってしまいました。こんな経験ははじめてで
 す。あらたと更めて吃驚びっくりしたように言うんだね。私も、その日ほど
 夥おびただしいのは始めてだったけれど、赤蜻蛉の群の一日都会みなぎに漲るの
 は、秋、おなじ頃、ほとんど毎年と云つてもいい。子供のうちか
 ら大好きなだけけれど、これに氣のついたのは、——うっかりじ
 やないか——この八九年以来なんだが、月はかわりません。きつ
 と十月、中の十日から二十日はつかの間、三年つづいて十七日というの
 を、手帳につけて覚えています。季節、天気というものは、そん
 なに模様の変らないものと見えて、いつの年も秋の長雨、しけつ
 づき、また大あらしのあつた翌あくるあさ朝、からりと、嘘のように青
 空になると、待つてたように、しずめたり浮いたり、風に、すら

すらすらすらと、薄い紅い霧をほぐして通る。

——この辺は、どうだろう。」

「え。」

話にききとれていたせいではあるまい、お米の顔は緋葉の蔭にほんのりしていた。

「……もう晚いんでしょう、今日は一つも見えませぬわ。前の月の命日に参詣をしました時、山門を出て……あら、このいい日和にむら雨かと思いました。赤蜻蛉の羽がまるで銀の雨の降るように見えたんです。」

「一ツずつかね。」

「ひとつずつ?」

「ニツずつではなかつたかい。」

「さあ、それはどうですか、ちよつと私気がつきません。」

「気がつくまい、そうだろう。それを言いたかつたんだ、いまの蜻蛉の群の話は。それがね、残らず、二つだよ、比翼なんだよ。」

その刺繡ししゅうの姿と、おなじに、これを見て土地の人は、初路さんを殺したように、どんな唄を唱うだろう。

みだらだの、風儀を乱すの、恥はぢを曝さらすのといつて、どうする気

だろう。浪で洗えますか、火で焼けますか、地震だつて壊せやしない。天あまを蔽おほい地みに漲なぎる、といつた処で、颶風はやてがあれば消えるだ

ろう。夢はかないものではあるけれども——ああ、その夢さを一人で身

に受けたのは初路さんだね。」

「ええ、ですから、ですから、おじさん、そのお慰めかたがた……
：今では時世がかわりました。供養のために、初路さんの手技てわざを
称ほめ賛たたえようと、それで、「糸塚」という記念の碑を。」

「……………」

「もう、出来かかっているんです。凶取は新聞にも出ていました。
台石の上へ、見事な白い石で大きな糸杵を据えるんです。刻んだ
糸を巻いて、丹にで染めるんだっていうんですわ。」

「そこで、「友禅の碑」と、対ついするのか。しかし、いや、とにかく、悪い事ではない。場所は、位置は。」

「さあ、行って見ましよう。半分うえ出来ているようです。門を
入って、直きの場所です。」

辻町は、あの、盂蘭盆の切籠燈きりこに対する、寺の会釈を伝えて、お京が渠かれに戯れた紅糸べにいとを思つて、ものに手繰られるように、提灯とともにふらりと立つた。

五

「おばけの……蜻蛉？……おじさん。」

「何、そんなものの居よう筈はずはない。」

ときも落着いたらしく、声を沈めた。その癖、たった今、思わず、「あ！」といったのは誰だろう。

いま辻町は、蒼然そうぜんとして苔蒸こけむした一基の石碑を片手で抱いて
 ——いや、抱くなどというのは憚はばかろう——霜より冷くつても、
 千五百石の女じょうろう※の、石の軀むくろともいうべきものに手を添えているの
 である。ただし、その上に、沈んだ藤色のお米の羽織が袖をすん
 なりと墓のなりにかかった、が、織だか、地紋だか、影絵のよう
 に細い柳の葉に、菊らしいのを薄色に染出したのが、白い山土に
 敷乱れた、枯草の中に咲残った、一ひとむら叢の嫁菜の花と、入交いりまぜに、
 空を蔽うた雑樹を洩もれる日光に、幻の影を籠こめた、墓はさながら、
 梢こずえを落した、うらがなしい綺麗な錦紗きんしゃの燈籠の、うつむき伏し
 た風情がある。

ここは、切立きつたてというほどではないが、巖組いわぐみみの径みちが嶮けわしく、碎

いた葉研やげんの底あがを上る、涸れた滝かの痕あとに似て、草土手の小高い処で、
る纍々いと墓が並び、傾き、また倒れたのがある。

上り切った卵塔の一劃、高い処に、裏山の峯を抽ぬいて繁ったのが、例の高燈籠の大榎で、巖を縫わだかまつて蟠わだかまつた根に寄つて、先祖代々とともに、お米のお母つかさんが、ぱつと目を開きそうに眠つてい
 る。そこも蔭で、薄暗い。

それ、持参の昼提灯、土の下からさぞ、半間だと罵倒ばとうしようが、
 白く据すわつて、ぼつと包んだ線香の煙が靡なびいて、裸蠟燭ろうそくの灯が、
 静寂な風かぜに、ちらちらする。

榎くぐを潜かつた彼方かなたの崖は、すぐに、大傾斜の窪地くぼみになつて、山の
 裾すそまで、寺の裏庭を取りまわして一ひとたに谷一面の卵塔である。

初路の墓は、お京のと相向つて、やや斜下、左の草土手の処にあつた。

見たまえ——お米が外套がいとうを折畳みにして袖に取つて、背後うしろに立添つた、前踞まえこゝろみに、辻町は手をその石碑にかけた羽織の、裏なまめの媚かしい中へ、さし入れた。手首に冴えて淡藍うすあいが映える。片手には、頑丈な、錆さびの出た、木鋏きばさみを構えている。

この大剪刀おおばさみが、もし空の樹の枝へでも引掛ひっかかつていたのだと、うっかり手にはしなかつたろう。盂蘭盆の夜が更けて、燈籠が消えた時のように、羽織で包んだ初路の墓は、あわれにうつくしく、且つあたりを籠めて、陰々として、鬼氣こもが籠るのであつたから。

鋏は落ちていた。これは、寺男の爺やまじりに、三人の日傭ひようど

取りが、ものに驚き、泡を食つて、遁出にげだすのに、投出したものであつた。

その次第はこうである。

はじめ二人は、磴いしだんから、山門を入ると、広い山内、鐘楼なし。

松を控えた墓地の入口の、鎖とぎさない木戸に近く、八分出来という

石の塚を視みた。台石に特に意匠はない、つい通りの巖組一丈余り

の上に、誂あつらえの枿を置いた。が、あの、くるくると糸を廻す枿は

見えぬ。くり抜いた跡はあるから、これには何か考案があるらし

い。お米もそれはまだ知らなかつた。枿えの四つの柄は、その半面

に對しても幸さいわに鼎かなえに似ない。鼎に似ると、烹にるも烙やくも、いづれ

織楚かよわい人のために見る目も忍びないであろう処を、あたかも好よし、

玉を捧ぐる白珊瑚しろさんごの滑なめらかなる枝に見えた。

「かえりに、ゆつくり拝見しよう。」

その母親の展墓である。自分からは急がすのをためらった案内者が、

「道が悪いんですから、気をつけてね。」

わあ、わつ、わつ、わつ、わつ、おう、ふうと、鼻呼吸いきを吹いた面つらを並べ、手を挙げ、胸たたを敲こぶしき、拳こぶしを振りなど、なだれを打ち、足ただらを踏んで、一時ひときに四人、摺違すれちがいに木戸口へ、茶色になつて湧わいて出た。

その声もあしおと躑あしおと音も、響くと、もろともに、落ちかかったばかりである。

不意に打つかりそうなのを、軽く身を抜いて路を避けた、お米の顔に、鼻をまともに突向けた、先頭第一番の爺が、面も、脛も、一縮みの皺の中から、ニンガリと変に笑ったと思うと、

「出ただええ、幽霊だあ。」

幽霊。

「おツさん、蛇、蝮？」

お米は——幽霊と聞いたのに——ちよつと眉を擧めて、蛇、蝮を憂慮した。

「そんげえなもんじゃねえだア。」

いかにも、そんげえなものには怯えまい、面魂、印半纏も交つて、布子のどんつく、半股引、空脛が入乱れ、屈竟

な日傭取が、早く、糸塚の前を摺抜けて、松の下に、ごしやごしやとかたまった中から、寺爺やの白い眉の、びくびくと動くが見えて、

「蜻蛉だあ。」

「幽霊蜻蛉ですだアい。」

と、冬の麦稈帽むぎわらぼうを被かぶつた、若いのが声を掛けた。

「蜻蛉なら、幽霊だつて。」

お米は、莞爾にっこりして坂上りに、衣紋えもんのやや乱れた、浅黄を雪に透く胸を、身繕いもせず、そのまま、見返りもしないで木戸を入いつた。

巖いわは鋭い。踏み上ちる径けは嶮わしい。が、お米の双の爪つめさきは、白い

蝶々に、おじさんを載せて、高く導く。

「何だい、今のは、あれは。」

「久助つて、寺爺やです。卵塔場で働いていて、休みのお茶のついでに、私をからかったんでしよう。子供だと思っっている。おじさんがいらつしやるのに、見さかいがない。馬鹿だよ。」

「若いお前さんと、一緒にからかわれたのは嬉しいがね、威おどかすにしても、寺で幽霊をいう奴があるものか。それも蜻蛉こかげの幽霊。」

「蛇や、蝮でさえなければ、蜥蜴とかけが化けたって、そんなに可こわ恐いもんですか。」

「居るかい。」

「時々。」

「居るだろうな。」

「でも、この時節。」

「よし、私だつて驚かない。しかし、何だろう、ああ、そうか。

おはぐるとんぼ、黒とんぼ。また、何とかいったつけ。漆のよう

な真まつくろ黒な羽のひらひらする、織ほそく青い、たしか河原蜻蛉とも云

つたと思うが、あの事じゃないかね。」

「黒いのは精霊蜻蛉ともいいますわ。幽霊だなんのつて、あの爺じじ

い。」

その時であつた。

「ああ。」

と、お米が声を立てると、

「酷いこと、墓を。」

といった。声とともに、着た羽織をすつと脱いだ、が、紐をどう解いたか、袖をどう、手の菊へ通したか、それは知らない。花野を颯と靡かした、一筋の風が藤色に通るように、早く、その墓を包んだ。

向う傾けに草へ倒して、ぐるぐる巻というよりは、がんじ搦みに、ひしと荒縄の汚いのを、無残にも。

「初路さんを、——初路さんを。」

これが女※の碑だったのである。

「莫塵にも、蓆にも包まないで、まるで裸にして。」
と気色ばみつつ、且つ恥じたように耳朶を紅くした。

いうまじき事かも知れぬが、辻町の目にも咄嗟とつさに印したのは同じである。台石から取って覆かえした、持扱つますいの荒くれた爪摺つまずれであらう、青々と苔の蒸したのが、ところどころむしられて、日の隈くま幽かすかに、石肌の浮いた影を膨らませ、影をまた凹くぼませて、残酷からに掬かめた、さながら白身の窠やつれた女を、反接きんぱく緊縛きんぱくしたに異ならぬ。

推察かたに難かたくない。いずれかの都合で、新しい糸塚のために、この位置を動かして持運かたぼうとしたらしい。

が、心ない仕事をどうする。——お米の羽織うぎに、そうして、墓の姿を隠して好よかった。花やかともいえよう、ものに激ふるました挙あ動いの、このしっとりした女房の人柄にに似すばややない捷しぐさい仕種しぐさの思掛しけなさを、辻町は怪あしままず、さもありそうな事と思つたのは、お京

の娘だからであつた。こんな場に出逢つては、きつとおなじはか
 らいをするに疑いない。そのかわり、娘と違い、落着いたもので、
 澄まして羽織を脱ぎ、背負揚しよいあげを棄て、悠然と帯いわおを巖いわに解いて、
 あらわな長襦袢ながじゆばんばかりになつて、小袖ぐるみ墓かぶに着せたに違
 ない。

何、夏なら、炎天なら何とする？……と。そういう皮肉な読者おかた
 には弱る、が、言わねば卑怯ひきようらしい、裸体はだかになります、しから
 ずんば、辻町が裸体にされよう。

——その墓へはまず詣でた——

引返ひっかえして来たのであつた。

辻町の何よりも早くここでしよう心は、
 立たちどころ処ところに繩を切つて

棄てる事であつた。瞬時といえども、人目に曝すに忍びない。行るとなれば手伝おう、お米の手を借りて解きほどこきなどするのにも、二人の目さえ当てかねる。

さしあたり、ことわりもしないで、他の労業を無にするという遠慮だが、その申訳と、渠等を納得させる手段は、酒と餅で、そんなに煩わしい事はない。手で招いても洗面の皺は伸びよう。また厨裡で心太を突くような跳梁権を獲得していた、檀越夫人の嫡女がここに居るのである。

栗柿を剥く、庖丁、小刀、そんなものを借りるのに手間ひまはかからない。

大剪刀が、あたかも蝙蝠の骨のように飛んでいた。

取つて構えて、ちと勝手は悪い。が、縄目を見る目に忍びないから、衣きぬを掛けたこのまま、留南奇とめきを燻たく、絵で見た伏籠ふせごを念じながら、もろ手を、ずかと袖裏へ。驚破すわ、ほんのりと、暖い。芬ぶんと薫つた、石の肌かわらの軟かさ。

思わず、

「あ。」

と声を立てたのであつた。

「——おばけの蜻蛉、おじさん。」

「——何そんなものの居よう筈はない。」

胸むな傍わきの小さな痣あざ、この青い蘚こけ、そのお米の乳はのあたりへ銚さみが

響きそうだったからである。辻町は一礼し、墓に向つて、屹きつといつた。

「お嬢さん、私の仕業が悪かったら、手を、怪我をおさせなさい。」

鋏さわやかは爽さわやかな音を立てた、ちちろも声せず、松風を切つたのである。

「やあ、塗師ぬしや屋様、——ご新姐しんぞ。」

木戸から、寺男の皺しわづら面めんが、墓地下で口をあけて、もう喚わめき、冷めし草履わらじの馴なれたもので、これは礮こうかくたる径みちは踏ふまない。草土手を踏んで横よこざまに、傍そばへ来た。

続いて日傭ひようとり取とりが、おなじく木戸口へ、肩を組合つて低く出た。

「ごめんなせえましょ、お客様。……ご機嫌よくこうやってござい

らつしやる処を見ると、まちげ間違えごともなかったの、何も、別条はなかつただね。」

「ところが、おっさん、少々別条があるんですよ。きみたちの仕事を、ちよつと無駄にしたぜ。一杯買おう、これです、ぶつぶつに繩を切きつぱら払った。」

「はい、これは、はあ、いい事をさつせえて下さりました。」

「何だか、あべこべのような挨拶だな。」

「いんね、全くだい事をなさせえました。」

「いい事をなさいましたじやないわ、おいたわしいじやないの、女※さんがさ。」

「ご新姐、それがね、いや、この、からげ繩、畜生。」

そこで、^{かが}踞んで、毛虫を踏潰ふみつぶしたような爪さきへ近く、切れ
て落ちた、むすびめの節立った荒縄を手繰棄すてに背後うしろへ匆出はねだしな
がら、きよろきよろと樹の空を見廻した。

妙なもので、下木戸の日傭取たちも、申合せたように、揃つて、
^{かが}踞んで、空を見る目が、皆動く。

「いい塩梅あんばいに、幽霊蜻蛉、消えたただかな。」

「一体何だね、それは。」

「もの、それがでござりますよ、お客様、この、はい、石塔を動
かすにつきましたで。」

「いずれ、あの糸塚とかいうのについての事だろうが、何かね、
掘返してお骨でも。」

「いや、それはなりませんねえ。記念碑発起押っぽだての、帽子、靴、洋服、袴、髯の生えた、ご連中さ、そのつもりであつたれど、寺の和尚様、承知さつしやりましねえだ。ものこれ、三十年経つたとこそいえ、若い女じょうろつうまが埋つてるだ。それに、久しい無縁墓たで、ことわりいう檀家もなしの、立合つてくれる人の見分もないで、と一論判ひとりつぱんあつた上で、土には触らねえ事になつたでがす。」

「そうあるべき処だよ。」

「ところで、はい、あのさ、石彫いしぼりの大え糸でけ枠の上へ、がっしりと、立派なお堂を据えて戸をあけたてしますだね、その中へこの……」

お米は着流しのお太鼓で、まことに優に立っている。

「おお、成仏をさっしやるずら、しおらしい、嫁菜の花のお羽織きて、霧は紫の雲のようだ、しなしなとしてや。」

と、苔こけの生えたような手で撫なでた。

「ああ、擦くすぐりたい。」

「何でがすい。」

と、何も知らず、久助は墓の羽織を、もう一撫で。

「この石塔を齋いっき込むもくろみだ。その堂がもう出来て、切組みも済ましたで、持込んで寸法をきっちり合わす段が、はい、ここはこの通り足場が悪いと、山門内うちまで運ぶについて、今日さ、この運び手間だよ。肩がわりの念入りで、丸太棒まるたんぼうで担かつぎ出しますに。——丸太棒めら、丸太棒を押し立ておったてて、ごろうじませい、あす

こにとぐるを巻いていますだ。あのさきへ矢羽根をつけると、掘立普請の齋とぎが出るだね。へい、墓場の入口だ、地獄の門番……はて、飛んでもねえ、肉親のご新姐ござらつしござらつしやる。」

と、泥でまぶしそうに、口の端はたを拳こぶしでおさえて、

「——そのさ、担むしろぎ出しますに、石の直じか肌はだに繩を掛けるで、藁わらなり蓆むしろなりの、花ものの草木を雪囲いにしますだね、あの骨法でなくば悪かんべいと、お客様の前めえだけんど、わし一応はいうたれども、丸太棒めら。あに、はい、墓つとさ苞いり入に及ぶもんか、手間障ざいだ。また誰も見ていねえで、構かまいごとねえだ、と吐こいての。

和尚様は今日は留守なり、お納所なつしよ、小僧も、総そう齋とぎに出さした。まず大事ねえでの。はい、ぐるぐるまきのがんじがらみ、

や、このしよで、転がし出した。それさ、その形かたでがすよ。わし
 さかがみごし屈腰で、膝はだかつて、面つらを突出す。奴等やつら三方からかぶさ
 りかかつて、棒を突挿そうとしたと思わつせえまし。何と、この
 鼻の先、奴等の目の前へ、縄目へ浮いて、羽はじさ弾いて、赤蜻蛉が
 二つ出た。

たつた今や、それまでというものは、四人八ツの、どんぐりまなこ団栗目
 に、ぬかむし糠虫一疋入らなんだに、かけた縄くぐさ下から潜つて石から湧わ
 いて出たはどうしたもんだね。やあやあ、しっしっ、吹くやら、
 払いますやら、静じつとして赤蜻蛉が動かねえとなると、はい、時代
 違いで、何の気もねえ若い徒てやいも、さてこの働かかきに掛つてみれば、
 記念碑系塚の因縁さ、よく聞いて知つてるもんだで。

ほれ、のろのろとこつちさき寄つて来るだ。あの、さきへ立つて、丸太棒をついた、その手拭てぬぐいをだらりと首へかけた、たくまし、逞い男です。奴が、女メの幽霊でねえか。出たツと、また髯ひげどのが叫ぶと、蜻蛉がひらりと動くと、かつと二つ、きゆう灸のような炎が立つ。冷い火を汗に浴びると、うら山おろしの風さ真黒まっくろに、どつと来た、煙の中を、目が眩くらんで遁にげたでござえますでの。……

それでがすもの、ご新姐、お客様。」

「それじゃ、私たち差出た事は、叱言こいことなしに済むんだね。」

「ほつてもねえ、いい人ひと扶たすけて下せえましたよ。時に、はい、

和尚様帰つて、逢わつせえても、万々沙汰なしに頼みますだ。」

そこへ、丸太棒が、のっそり来た。

「おじい、もういいか、大丈夫かよ。」

「うむ、見せえ、大智識さ五十年の香染こうぞめの袈裟けさより利益があつての、その、嫁菜ちりめんの縮緬なかの裡で、幽霊はもう消滅だ。」

「幽霊も大袈裟だがよ、悪く、蜻蛉たたに崇たられると、瘡おこりを病むとい
うから可恐おっかねえです。縄をかけたら、また崇たつて出やしねえかな。」
と不精髯の布子が、ぶつぶついった。

「そういう口で、何で包むもの持って来ねえ。糸塚さ、女※様、
素すで括くくつたお崇すりだ、これ、敷松葉すきやの数寄屋すきやの庭の牡丹に雪囲い
をすすると思えさ。」

「よし、おれが行く。」

と、冬の麦稈帽むぎわらぼうが出ようとする。

「ああ、ちよつと。」

袖を開いて、お米が留めて、

「そのまま、その上からお結いえなさいな。」

不精髻が——どこか昔の提灯屋に似ていたが、

「このままでかね、勿もつてい体至極もねえ。」

「かまいませんわ。」

「構わねえたつて、これ、縛るとなると。」

「うつくしいお方が、見てる前で、むぎとなあ。」

麦藁むぎわらと、不精髻が目を見合つて、半ばつぶや眩くらくがごとくにいう。

「いいんですよ、構いませんから。」

この時、丸太棒が鉄のように見えた。ぶるぶると腕に力の漲みなぎつ

たぐま
た遅しいのが、

「よし、石も婉軟やんわりだろう。きれいなご新姐を抱くと思え。」

というままに、頸くびの手拭が真額まっこうでピンと反そると、棒をハタと投げ、ずかと諸手を墓にかけた。袖の撓しなうを胸へ取った、前抱きにぬつと立ち、腰を張つて土手を下りた。この方が掛かり勝手がいらしい。巖路いわみちへ踏みはだかるように足を拵いげ、タタと総身に動揺いぶりを加くれて、大きな蟹が竜宮の女房を胸に抱いて逆落しの滝に乗るように、ずずずと下りて行く。

「えらいぞ、権太、怪我をするな。」

と、髯が小走りに、土手の方から後へ下りる。

「俺だつて、出来ねえ事はなかつたい、遠慮をした、えい、誰に

と、お米を見返つて、ニヤリとして、麦藁が後に続いた。

「頓生菩提。……小川へ流すか、燃しますべい。」

そういつて久助が、搔き集めた縄の屑を、一束ねに握つて腰を擡げた時は、三人はもう木戸を出て見えなかつたのである。

「久……爺や、爺やさん、羽織はね。式台へほうり込んで置いて可いんですよ。」

この羽織が、黒塗の華頭窓に掛つていて、その窓際の机に向つて、お米は細りと坐つていた。冬の日は釣瓶おとしというより、梢の熟柿を礫に打つて、もう暮れて、客殿の広い畳が皆暗い。

こんなにも、清らかなものかと思う、お米の頸を差覗くよう

にしながら、盆に渋茶は出したが、火を置かぬ火鉢越しにかの机の上の提灯を視^みた。

（——この、提灯が出ないと、ご迷惑でも話が済まない——）
 信仰に頒布する、当山、本尊のお札を捧げた三宝を傍^{かたわら}に、硯^{すずり}箱^{ばこ}を控えて、硯の朱の方に筆を染めつつ、お米は提灯に瞳を凝らして、眉を描くように染めている。

「——きつと思いついた、初路さんの糸塚に手向けて帰ろう。赤蜻蛉——尾を銜^{くわ}えたのを是非頼む。塗師屋さんの内儀でも、女学校の出じやないか。絵というと面倒だから図画で行くのさ。紅^{べに}を引いて、二つなられば、羽子の羽でもいい。胡蘿蔔^{にんじん}を織に松葉をさしても、形は似ます。指で挟んだ唐辛子でも構わない。——」

と、たそがれの立籠めて一際漆のような板敷を、お米の白い足袋の伝う時、そその唆かして口説いた。ほくしんみょうけんぼさつ北辰妙見菩薩を拝んで、客殿へ退く間であつたが。

水をたつぷりと注して、ちよつと口で吸つて、つぼみ苔の唇をほつり黒く、八枚の羽を薄墨で、しかし丹念にあしらつた。瀬戸の水入が渋のついた鯉だつたのは、あつら詭えたようである。

「出来た、見事々々。お米坊、机にそうやった処は、赤絵の紫式部だね。」

「知らない、おつかさんにいいつけて叱らせてあげるから。」
「失礼。」

と、茶碗が、また、赤絵だつたので、思わず失言を詫びつつ、

準藤原女史に介添してお掛け申す……羽織を取入れたが、窓あかりに、

「これは、大分うらに青苔がついた。悪いなあ。たたんで持つか。」

と、持ったのに、それにお米が手を添えて、

「着ますわ。」

「きられるかい、墓のを、そのまま。」

「おかわいそうな方ですもの、これ、しのぶずり葱摺すりですよ。」

その優しさに、思わず胸がときめいて。

「肩をこつちへ。」

「まあ、おじさん。」

「おつかさんの名代だ、娘に着せるのに仔細しさいない。」

「はい、……どうぞ。」

くるりと向きかわると、思いがけず、辻町の胸にヒヤリと髪をつけたのである。

「私、こいしい、おつかさん。」

前刻さつきから——辻町は、演芸、映画、そんなものの楽屋に縁がある——ほんの少々だけれども、これは筋にして稼げると、潜ひそかに悪心の萌きざしたのが、この時、色も、慾よくも何にもない、しみじみと、いとしくて涙ぐんだ。

「へい。お待遠でござりました。」

片手に蠟燭ろうそくを、ちらちら、片手に少しばかり火を入れた十能

を持って、婆さんが庫裏から出た。

「糸塚さんへ置いて行きます、あとで気をつけて下さいましよ、烏が火を銜くわえるといいますから。」

お米も、式台へもうかかった。

「へい、もう、刻限で、危あぶなげ気はござりましねえ、嘴ふ太と烏も、嘴ほ細そ烏も、千羽ヶ淵の森へ行いんで寝ました。」

大城下は、目の下に、町の燈ひは、柳にともれ、川に流るるい。磴しだんを下へ、谷の暗いように下りた。場末の五燈しよくはまだ来ない。

あきない帰りの豆腐屋が、ぶつかるように、ハタと留った時、
「あれ、蜻蛉が。」

お米が膝をついて、手を合せた。

あの墓石を寄せかけた、塚の糸柁の柄にかけて下山した、提灯が、山門へ出て、すこしずつ高くなり、裏山の風一通り、赤蜻蛉が静と動いて、女の影が……二人見えた。

昭和十四（一九三九）年七月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成9」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年6月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十四卷」岩波書店

1940（昭和15）年6月30日第1刷発行

※「切燈籠」と「切籠燈」の混在は、底本と底本の親本の通りなので、そのままとしました。

入力：門田裕志

校正：多羅尾伴内

2003年9月3日作成

2008年10月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

縷紅新草

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>